

100年の記憶と記録

— 小田原の関東大震災 —

会期：8月26日(土)～10月29日(日)
会場：小田原市郷土文化館

今から100年前の大正12年(1923)9月1日に発生した関東大震災(大正関東地震)は、死者・行方不明者10万5千人という甚大な被害をもたらし、日本の政治・経済の中核であった東京横浜を大混乱に陥れました。小田原町を含む足柄下郡においても、建物の倒壊や火災、土砂災害や津波によって1,600人以上が犠牲になりました。

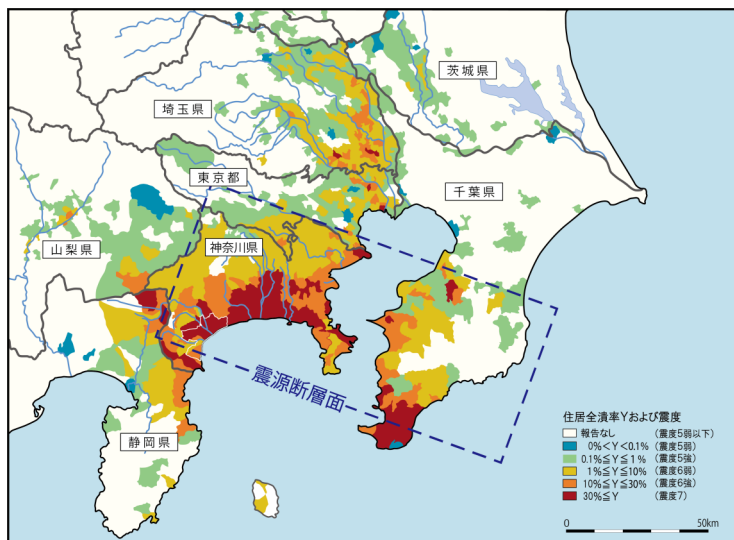
企画展「100年の記憶と記録—小田原の関東大震災—」では、地震の発生から現在までの100年の間に人々の記憶や記録によって受け継がれてきた様々な資料から、関東大震災を紹介します。

震災から100年が経過し、関東大震災の記憶は薄れつつあります。しかし、震災は忘れた頃にやってきます。本展を通じて関東大震災、また小田原での地震被害について知っていただき、防災の大切さについて改めて考えていただければ幸いです。

関東大震災と小田原

9月1日は陰暦でいう正月節(立春)から数えて「二百十日」にあたり、よく台風が来ると言われていました。大正12年(1923)9月1日、この日の小田原付近は、夜来からの風雨が朝方まで続き、午前8時頃には雲間から太陽がさしてきたが、なんとなく「二百十日」を意識させるような雲の多い鬱陶しい天気だったといえます。そんな不吉な予感的中するかのように、正午少し前の午前11時58分44秒、神奈川県西部を震源地とする大正関東地震(以降、関東大震災と呼ぶ)が発生しました。地震の規模はマグニチュード7.9、1都6県という広い範囲で震度6以上の揺れを記録し、全半壊・焼失・流出・埋没の被害を受けた住宅家屋は37万棟以上、10万5千人を超える人々が亡くなるなど、関東一帯に非常に大きな被害をもたらしました。

小田原付近は足柄平野という酒匂川の沖積低地に位置しており、軟弱な地盤であることも関係し、広い範囲で震度6以上の揺れであったと推定されています。ある資料によると、足柄下郡の死者・行方不明者は1,683人、半壊以上の被害を受けた住家は、総戸数16,252戸に対して14,853戸と報告され、被災率91%という驚異の数字が出されています。この被災率は県内でも群を抜いて高く、9月5日に神奈川県知事安河内麻吉から内相後藤新平に宛てた文書のなかで、足柄下郡の被害は「最モ甚大ニシテ各町村」にわたっていたと報告されており、特に小田原町の被害は「最モ莫大」で、ほとんど「全滅ノ状態」であったと伝えられています。



住居全潰率および推定震度分布(武村2013を一部改変)

小田原町の状況を概観すると、本震及び余震で多くの建物が倒壊、その後13か所から火の手があがりました。猛火は烈風にあおられて竜巻が発生し、刻々と変わる風向きにより、炎は街から街へ広がっていきました。東海道の下を暗渠となって流れていた用水は、跡形もなく破壊されて消火もままならず、火は延々14時間ほど燃え続け、翌日の午前2時に鎮火した時には小田原町の3分の2が焦土と化していました。足柄下郡役所、小田原町役場、小田原警察署も倒壊し、町の中心部は一時はまったく機能麻痺という状態に陥りました。

地震による犠牲者についてみると、小田原町では倒壊した建物による圧死だけでなく、その後の火災でも多く

の方が亡くなりました。このうちの一人が閑院宮別邸（市内城山）に滞在中であった閑院宮寛子女王で、地震とともに別邸が倒壊し圧死しました。十字町（市内南町）の足柄病院は小田原きっての大病院でしたが、建物の倒壊と火災で医師・看護婦・患者など33人が圧死、焼死しました。

近隣に目を向けると、足柄村井細田（市内扇町）にあった小田原紡績株式会社の煉瓦造りの工場が地震により一瞬で倒壊、10代から20代の女子を中心に134人もの従業員が圧死し、重傷者も200人にのぼりました。さらに片浦村根府川では3か所で発生した土砂災害により、400人以上が犠牲になりました。根府川の被害についてやや詳しく述べると、根府川駅では、駅の上方の崖が崩れ、入線しようとしていた熱海線の下り列車がホームや駅舎、ホームにいた人々もろとも崖下に転落し、一方、根府川集落では、白糸川上流にある大洞山の山体崩壊により発生した山津波が、時速48kmの速さで集落を飲み込み、また、寒ノ目山トンネル出口では、熱海線の上り列車が土砂の下敷きとなりました。この地域一帯の土砂災害により道路も通行不可という状況になったため、食糧支援や救護活動の到着にも時間を要しました。

被害はそれだけにとどまりません。この年の7月に完成し「耐久100年」とうたわれた鉄筋コンクリート製の酒匂橋が完成からわずか40日で崩壊し、また大正9年に架けられた鋼鉄製の酒匂鉄橋も、橋桁のひとつが酒匂川に倒れるように落下するなど、揺れの大きさを物語っています。熱海線の国府津駅から小田原駅に至る線路や、東海道線下曾我駅近辺の線路の築堤も多くの場所で崩壊し、列車が転覆しました。町のシンボルであった小田原城址も天守台跡が壊され、石垣もことごとく崩れ、御用邸の建物もすべて倒壊するなど目も当てられない状況で、街中の惨状と合わせて、まさに空前絶後の災害でした。

学校の被害も大きく、多くの校舎が倒壊・焼失しました。理科室にあった化学薬品が火災の原因となった学校もあります。この日は土曜で、しかも2学期の始業式であったため、ほとんどの児童生徒は下校しており校内での犠牲者が出なかったことは不幸中の幸いでしたが、教員の犠牲者は少なくありませんでした。

このようにざっと概観しただけでも、足柄下郡は各町村で大きな被害を受け、町村役場や警察は、治安維持と罹災者の保護が急務であるとされました。最も重要であった食糧と水の確保では、小田原駅構内や足柄銀行、小田原通商銀行などの在庫米が配給され、飲料水については井戸掘り業者が突貫工事で井戸を掘削したことで急場をしのごうことができました。さらに、この未曾有の震災においては、自力更生や相互扶助といった力が働き、早い段階から実業家や商人からの食料・物品の提供が行われ、また民間団体や警察による食料確保のための積極的かつ迅速な行動により、大きな混乱を防ぐことができたことは、注目すべき点であると言えます。

一方で、地震被害の拡大や、被災地一帯に急速に広まりつつあった朝鮮人による放火・暴動の流言に対する治安維持のため、東京・神奈川を含む一府三県に戒厳令が施行されました。未曾有の大震災の中で人々の不安は社会の混乱を招き、小田原町周辺でも「朝鮮人暴挙」のデマが猛烈な勢いで広まっていき、一時は竹槍や刀剣類を携えた町民らによる自警団があちこちで結成されました。行き過ぎた防衛は、朝鮮人と誤って台湾人を殺害してしまう不祥事や、朝鮮人2人に重傷を負わせるなどの事件の発生にもつながり、小田原警察署が朝鮮人暴動説は事実無根であることを発表するとともに、凶器の携帯を禁止したことで、事態はようやく沈静化しました。

こうした異常事態を乗り切るためには、災害の対処とともに復興計画を立て、進めていく必要がありました。前述のとおり、地震後に発生した火災で町の大部分が灰塵と帰した小田原町では、家を失った人々が学校の校庭や空き地などに仮小屋を建てており、住家は重要な問題でした。10月に設置された小田原町復興会は、住宅の建築材料の斡旋を第一に行い、翌年7月までにはバラック小屋も含めて9割近くの家が復興するに至りました。このほか町営水道の修理や道路の幅員拡張など、震災前以上の発展をうながす計画を立てましたが、産業経済面での復興は思うように進まず、財政はひっ迫しており、復興事業は昭和に引き継がれていきました。



倒壊した小田原駅とちんりう

第1章 大正関東地震の発生

急速な近代化を進めた明治時代が終わりを迎え、続く大正時代は、庶民が社会に対して声を上げ始めた時代でした。第一次世界大戦こそ起きましたが、民主主義の発展や自由主義を求めた大正デモクラシーは大正14年（1925年）には普通選挙を実現させ、一方で文化の面では、活動写真やカメラが普及しはじめ、東京の街にはカフェーや三越百貨店が誕生し、「今日は帝劇、明日は三越」という言葉も生まれました。大正11年には上野で「平和記念東京博覧会」が開催されるなど、さまざまな大衆文化が花開いた時代でした。

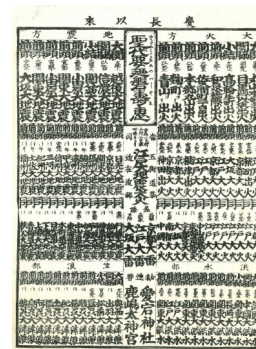
このような近代化した首都圏を襲い、一瞬にして多くの人々の命を奪ったのが、今から100年前に発生した関東大震災です。神奈川県西部を震源として発生したマグニチュード7.9という巨大地震は、日本の産業・経済と政治の心臓部を直撃し、政治・行政等のあらゆる分野は麻痺状態に陥りました。この地震により国の受けた損害額は、前年度の国の一般会計予算の4倍に及ぶ、60億円と推定されました。

関東大震災以前の小田原の地震

古来より小田原周辺は、たびたび大地震に見舞われてきました。記録に残る最も古い地震は、弘仁9年（818）に発生した弘仁の大地震で、地震の規模は明らかではありませんが、寛平4年（892）に編纂された類聚国史には「相模・武蔵等大地震、圧死者無数」と記載されています。

その後も小田原に影響を与えた主な地震は、関東大震災までに13回も発生しており、特に江戸時代の後半には約70年の周期で大地震が発生しています。これらの地震により小田原城や城下町はたびたび大きな被害を受けてきました。

文字記録の少ない時代の地震については、発掘調査の記録などから知ることができますが、江戸時代に入ると木版印刷を行う版元（出版業者）が多く誕生し、数多くの記録が残されるようになります。なかでも瓦版や錦絵は、事件や大火、天変地異などを絵入りで伝え、人々はこぞって買い求めました。



【番付】 聖代要廻磐寿恵



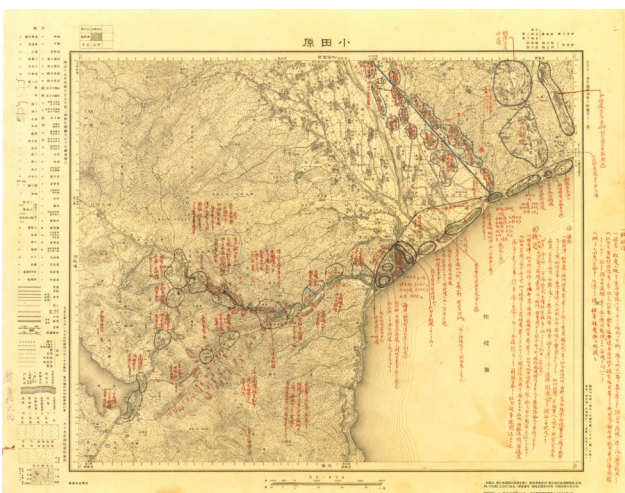
地震火脈万国図説

足柄下郡の地震被害と記録

足柄下郡における地震の規模は、多くの地域で震度6以上、特に市内東部では震度7と推定され、まさに激震が走ったような状況でした。建物の倒壊、道路の陥没や地割れ、橋の落下、列車の転覆事故などのほか、火災や竜巻、山津波、津波も発生し、目を覆うばかりの惨状でした。

関東大震災の被害状況は多くの資料にまとめられており、震災の第一級の資料としては、震災予防調査会が大正13年に発行した『震災予防調査会報告 第100号』が有名です。また小田原を含む足柄下郡の被害については、『大正震災志』（昭和元年、内務省）や、『神奈川県震災誌』（昭和2年、神奈川県）に被害状況や損害、復旧の状況などが地域別で詳細に記録されています。

このほか小田原警察署がまとめた『関東大震災被害報告』では警察の立場から見た地震被害を、参謀本部陸地測量部（国土地理院）が震災直後に10日間という短期間で現地を踏査して作成した『震災地応急測図原図』では、主要道路や鉄道の被害状況、また沿線・沿道の町村の被害状況や復旧までの日数などを地図によって知ることができます。



震災地応急測図原図（小田原）

第2章 100年の記憶と記録

関東大震災に関する記録は、発生当初から様々な形で残されています。

文書による記録では、公的な被害報告書を中心に、新聞や雑誌、また日記や手紙といった私文書なども含めると、非常に多くの記録が残っています。震災の状況を撮影した膨大な量の写真も残されており、100年後に生きる我々も、この未曾有の大震災の被害を視覚的に捉えることができます。これらは、地震発生から、比較的時間をあけず残された記録です。

一方で、震災から数年後、数十年後に残された記録として、絵画や体験談、慰霊碑や復興記念碑などの伝承碑が挙げられます。さらに、発掘調査によって地面の下から見つかる地震の痕跡なども、震災を伝える重要な資料です。一瞬にして多くの人々の命と平穏な暮らしを奪った関東大震災。発生から今日まで100年の間に残され受け継がれてきた記憶や記録を紹介します。

100年前の記憶

関東大震災の被害状況は、当時すでに一部の人々の間で普及していたカメラによって、多くの写真に残されており、小田原においても、五十嵐写真館や松井十字堂など町の写真技師や写真材料商のほか、アマチュアカメラマンなどが撮影した写真が数多く残っています。崩れた建物や駅、道路に散乱した屋根瓦、陥没した道路、脱線した列車、小田原城址の崩れた石垣、一面焼け野原の市街地など、写真の持つ記録の正確さは時を超えて100年後の我々にも地震被害の一部始終を鮮明に見せてくれます。

しかし忘れてはならないのは、彼らもまた被災者であるということです。自宅や仕事場が地震の被害に遭いながらも、カメラを携えて懸命に震災の状況を撮影した人々が残した100年前の記録をとおして、小田原の地震被害について紹介します。



東海道（国道1号）の被害



お堀に転落した桜並木



脱線した列車（小田原駅）
（横浜開港資料館蔵）



▲箱根口今にも倒壊しそうな建物
（小田原市立中央図書館蔵）

忘れられない光景—小暮次郎の記

明治40年(1907)小田原に生まれた小暮次郎は、当時暮らしていた実業家 山下亀三郎の別邸内の借家（市内南町）で地震に遭いました。16歳だった小暮少年は、住み慣れた町が炎に包まれる様子を見て「これでこの世は終わりかと思った」と語っています。

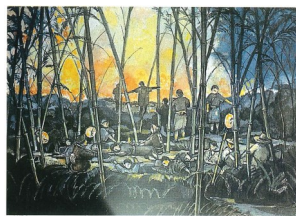
小暮氏が趣味で描いた水彩画は、いずれも後年になって自身の記憶や当時の写真を頼りに、昔の街並みを描いたものです。関東大震災の被害の様子を描いた水彩画も、震災から60年近く経過した昭和50年代頃に描いています。それにもかかわらず、まるで昨日の出来事のように鮮明に描かれている絵画からは、震災がいかに小暮少年にとって忘れられない衝撃的な出来事であったかが伝わってくるようです。



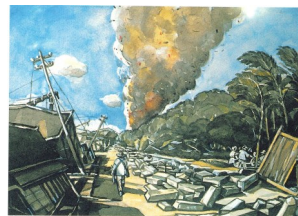
いろいろ被災



燃える小田原高等女学校



山下邸内の竹藪に避難



山下邸裏門の崩れた石垣と
足柄病院の火災

根府川地区の土砂災害

足柄下郡の南西に位置する片浦村は、県内でも大きな被害を受けた場所として知られています。片浦村は、石橋、米神、根府川、江之浦という4つの地区からなり、このうち根府川地区において、地震の発生とともに3か所で土砂災害が発生したのです。

1つ目は熱海線根府川駅において、下り列車が駅のホームに入線しようとしていた瞬間に地震が発生、駅の上部の崖が地すべりを起こし、列車が駅舎やホームにいた人々もろとも、40m下の海中・海岸に転落した事故です。2つ目は白糸川上流の大洞山の一部が山体崩壊を起こし、土砂が山津波となって白糸川を流れ下って根府川集落を飲み込み、さらに白糸川の河口で遊泳中だった児童も山津波の犠牲になった事故です。そして3つ目は、上り列車が熱海線の寒ノ目山トンネルを走行中に地震が発生し、先頭の機関車がトンネルの出口で土砂崩れに巻き込まれた事故です。この3つの土砂災害により400人以上が命を落としたほか、山津波によって熱海線の白糸川橋梁(橋脚はコンクリート製、橋桁は鋼鉄製だった)も海へ押し流され、復旧には長い時間を要しました。



土砂災害の範囲 (内田一正1975を一部改変)



根府川駅から海岸に転落した列車※



トンネル出口での土砂災害



山津波で埋没した白糸川橋梁※



根府川駅の再開 初列車の到着※

※ … 横浜開港資料館蔵

掘り起こされた記憶

地震の痕跡は地中にも存在します。発掘調査によって地面の下から検出される崩落・地割れ・地滑り・噴砂などの遺構や、地震の被害を受けた遺物などです。小田原市内、特に小田原城周辺の発掘調査では、中世や近世の遺構の上に近代(明治・大正時代)の遺構が確認され、この中で関東大震災の痕跡が発見されることがあります。

本町遺跡第Ⅷ地点(市内本町)では、関東大震災後の復興の中で、震災によって崩れた建物の礎石や生活用品、火災で焼けた土などを一括廃棄した土坑が見つっています。また、筋違橋町遺跡第Ⅱ地点(市内南町)では、火災こそ免れたものの、震災で倒壊した陶器店の商品だったと思われる皿が揃いで20枚近く出土しています。これらは地震から何十年も後になって検出される、掘り起こされた記憶と言えます。

100年前の記憶

震災から100年が経過した今日では、体験者から当時の話を聞くことは難しくなっています。しかし震災体験者の声は、その時の様子をリアルに伝える貴重な記録です。震災後にまとめられた被害報告は官僚的な文章で書かれた事実報告であり、写真もまた地震後の状況を伝えるものであることを考えると、被災者の体験談は多少の記憶違い等を考慮しても、地震の瞬間を伝える重要な情報であると言えます。

関東大震災を小田原で体験した人々の体験談としては、自治会等がまとめた記録集や個人の手記、日記などがあります。下曾我の自宅で地震に遭った私小説家の尾崎一雄も、自伝「あの日この日」に地震に遭った時の様子を書いています。

これらの体験談には、地震の状況だけでなく、その時どんな行動をしたか、地震の際は何が大切かなども書かれており、実際に地震を体験した人たちの声の中に防災を考えるヒントも読み取ることができます。

第3章 震災からの復興

未曾有の大震災から、人々はどのように復興を目指したのでしょうか。

関東大震災の復興については、後藤新平による帝都復興計画が有名ですが、これは旧東京市・旧横浜市を対象としており、それ以外の市町村は、それぞれで「復興促進会」を結成し、自力による復興とすることが基本とされていました。

小田原町の復興の概況を見てみると、震災から約50日後の10月24日に「小田原町復興会」を結成し、仮設バラックを含めた小店舗住宅への建築材料の斡旋をはじめ、水道施設、道路、橋、堤防、農業用水路などの復旧復興を計画しています。また、震災応急資金として神奈川県に貸し付けられた100万円のうち、小田原町に4万6千円、別に小学校応急施設費として12万6,600円があてられ、教育施設の復旧も重点的に行われるなど、震災の直後から被災者の救援とあわせて各方面での復興を目指していきました。

小田原町の復興

震災後、被災者救援にとって何よりも重要であったのは食料と水の確保でした。これらは役場や警察署の指導で小田原駅構内の倉庫や地方銀行が保管していた米を被災者に提供したり、店舗が商品である食料や衣類を提供するなど、相互扶助の力により迅速に手が打たれました。一方、警察署や小田原保勝会がそれぞれ県外へ出向いて食糧の供給を要請した結果、静岡県や大阪府から多大な物資の寄付を得ることができ、また町内の井戸掘り業者に共同使用の掘り抜き井戸を掘らせたことで、当面の飲料水も確保されました。このほか便所や道路側溝の崩壊による衛生問題、上下水道の破壊による伝染病の蔓延、道路の損壊による物資輸送の停滞も問題となりましたが、これには町村当局の主導のもと、消防組や青年会、在郷軍人会などが中心となり復旧修繕に努めました。

一方で、「小田原町復興会」を設置して、住宅家屋の資材の斡旋、町営水道の修理、道路の拡幅など、復興を機に町の発展をうながす計画が練られましたが、大部分は不況による資金不足のため手付かずの状態が続き、復興には長い時間を要しました。

松原神社の復興

小田原市本町に位置する松原神社は、戦国時代には小田原北条氏の崇敬を受け、江戸時代には小田原宿の総鎮守として、古くから親しまれてきました。関東大震災では、本震・余震にも耐えましたが、火災にのまれ、石段と狛犬、そして直前に氏子と社司によって運び出された御神体を残して灰燼に帰しました。

松原神社の復興は、震災から3か月後の12月末、復興当局より建築材料の無償提供を受け、仮社殿の再建から始まります。翌年1月には早くも例大祭が予定通り行われ、氏子らの努力により仮神輿で渡御の神事も行われました。その後も氏神社殿の復興新築に対する氏子内各職の惜しみない努力や、県からの神社震災復旧補助費を受けて、社務所、神輿・神輿庫、本殿が再建され、昭和6年11月拝殿の落成をもって、松原神社の復興造営は完了しました。

江嶋の復興と足柄茶

小田原市栄町の銀座通りに面して建つ「小田原 江嶋」は、箱根関所の役人を務めていた江嶋権兵衛が寛文元年(1611)に創業した茶・紙商の老舗です。家1軒が3千円で建つ時代に2万3,953円91銭をかけて建てられた立派な建物でしたが、地震で倒壊、その後の火災によりわずかな帳簿などを残して焼失しました。店舗の復興には、地震で崩れないよう堅牢な造りを目指し、資材集めに2年、建設に3年を要し、昭和4年(1929)に再建されました。屋根には17枚もの熨斗(のし)瓦を積み上げ、堂々とした瓦葺きの店構えを見せています。

一方、震災で大きな被害を受けた足柄上郡清水村(昭和30年に山北町に合併)では、村の再興をかけて静岡県から茶の栽培技術を学び、足柄茶の栽培が始められました。今でこそ山北町の主要産業である足柄茶ですが、生産が軌道に乗るまでには多くの時間と労力を要しました。その中で、昭和4年に製茶の販売先として販売量116貫の半分以上にあたる63貫を卸していたのが、小田原江嶋です。茶商の老舗として同年に再建された江嶋は、足柄茶の取引を通じて清水村の復興にも少なからず関わっていたことがわかります。

第4章 震災を伝える伝承碑

自然災害に関する事柄が記載されている石碑を、自然災害伝承碑と呼びます。災害による被災状況などを伝えると同時に、当時の被災場所に建立されることが多いことから、地図を通じてそれらを伝えることは、その地域に住む人々の防災意識の向上に役立つものと期待されます。

小田原市内に残る関東大震災に関する伝承碑の多くは、震災で亡くなった人々を悼む慰霊碑や、震災で被害を受けた寺社の復興碑、また耕地整理をはじめ地震で被害を受けた農道や灌漑用水路など、農業生産に関わる土木整備の完了を伝える記念碑などで、生き残った家族や地域の住民などによって建立されました。市内にはこのような伝承碑が地震被害のあった場所に建てられ、特に土砂災害で多くの人々が犠牲になった根府川周辺には、石碑が数多く残っています。

伝承碑には震災の状況や亡くなった人の名前、復興の過程や掛かった費用、寄付金額や関係者の氏名などが刻まれ、大切な人や家族を失いながらも復興に尽力した人々の苦難と努力を後世に伝えていきます。



関東大震災殉難碑（根府川駅）

地滑りによる土砂災害によって根府川駅で亡くなった人々を弔う慰霊碑。震災から50年後の1973年に根府川駅職員一同によって建立されました。根府川駅構内に建っています。



大震災耕地復旧記念碑（寺山神社）

片浦村はみかんの産地として有名でしたが、震災により柑橘畑の石垣や畦畔道路が崩れるなど、大きな被害を受けました。そこで耕地整理組合を設立して修築に着手し、昭和3年8月に竣工したことを記念して石碑が建てられました。



大震災歿死者慰霊塔（岩泉寺）

根府川集落を襲った山津波によって亡くなった、集落全体の犠牲者の供養塔です。碑の裏側には犠牲者289名の氏名が家別・施主別に刻まれています。



震災復興記念碑（三島神社）

三島神社のある千代地域は、建物の全半壊率が100%という大きな被害を受けました。しかし昭和3年11月の御大典（昭和天皇の即位の礼）までに社殿や神輿が再建され、これを記念して石碑が建立されました。

第5章 いつか来る地震に備えて

「天災は忘れられたる頃来る」

この言葉は、明治から大正にかけて活躍した文学者で物理学者でもある寺田寅彦（1878-1935）が残した言葉とされています。この言葉のとおり、天災は忘れた頃に突然やってきて、大きな被害をもたらします。

日本列島の周辺は複数のプレートが近づきあっており、地震そのものを防ぐことは不可能といえるでしょう。しかし、地震による被害(=震災)を少しでも減らすため、日々研究が行われています。地震大国である日本では、明治時代から現在まで、地震に関する様々な調査研究や観測記録が蓄積され、それに基づく地震の発生予測や強震動予測は、地震対策に多大な成果を挙げています。

一方で、いつか来る、しかしいつ来るかはわからない地震に対して私たちができることは、一人一人が地震や防災に対する正しい知識を持ち、日頃から備えることではないでしょうか。

関東大震災から100年を迎える本年、改めて防災について考えてみてください。

『100年の記憶と記録－小田原の関東大震災－』 出品目録

令和5年(2023)8月26日(土)～10月29日(日)

資料名	所蔵
1章 大正関東地震の発生	
嘉永六年地震御届書之写	小田原市郷土文化館
相模国大地震	小田原城天守閣
地震火脈万国図説	小田原城天守閣
聖代要廻磐寿恵	小田原城天守閣
【パネル】 今村式二倍強震計記象	東京都復興記念館
【パネル】 震災地応急測図原図「小田原」(複製)	国土地理院
【パネル】 震災地応急測図原図「熱海」(複製)	国土地理院
『大正震災志』(上巻、下巻)	小田原市郷土文化館
『大正震災誌志附図』	小田原市郷土文化館
『大正震災志寫眞帖』	小田原市郷土文化館
『大正十二年九月一日関東地方大震災火災記念寫眞帖』	小田原市郷土文化館
『大正十二年九月一日大震災記念寫眞帖』	小田原市郷土文化館
2章 100年の記憶と記録	
小田原箱根震災寫眞帖	オクツ薬局
ガラス乾板	小田原市郷土文化館
絵葉書「小田原町大震災実況」	小田原市郷土文化館
木製大判カメラ	オクツ薬局
済生堂薬局小西本店 上棟式	済生堂薬局小西本店
【写真】 完成した小西薬局	『鉄道開通記念写真帖』より転載
【写真】 倒壊した小西薬局(奥に五十嵐写真館)	小田原市立中央図書館
【写真】 倒壊したういろう	小田原市立中央図書館
【写真】 本町 国道1号付近の惨状	小田原市立中央図書館
【写真】 国道1号 諸白小路交差点辺りから国府津方面を見る	小田原市郷土文化館
【写真】 国道1号南町辺りから国府津方面を見る	小田原市郷土文化館
【写真】 国道1号 諸白小路交差点辺りから箱根方面を見る	小田原市郷土文化館
【写真】 銀座通りの被害状況	小田原市立中央図書館
【写真】 国道1号沿いの傾いた電柱	小田原市立中央図書館
【写真】 箱根口 今にも倒壊しそうな建物	小田原市立中央図書館
【写真】 崩れた酒匂橋と警戒にあたる騎馬憲兵	小田原市立中央図書館
【写真】 船で酒匂川を渡る人々	小田原市立中央図書館
【写真】 酒匂川の仮橋	『関東大震災寫眞帖 神奈川県』より転載
【写真】 倒壊した小田原駅とちん里う	小田原市郷土文化館
【写真】 倒壊した小田原駅前のちん里う	小田原市立中央図書館
【写真】 支柱で支えられる小田原駅舎入口	横浜開港資料館
【写真】 復旧の進む小田原駅構内	横浜開港資料館
【写真】 小田原駅構内で脱線した列車	横浜開港資料館
【写真】 熱海線 崩れた早川駅のホームと駅舎	横浜開港資料館
【写真】 熱海線 崩れた鴨宮駅ホームの駅舎	横浜開港資料館
【写真】 早川あやめ橋辺りの惨状	オクツ薬局
【写真】 早川口軽便会社前の惨状	オクツ薬局
【写真】 落下した酒匂川鉄橋の橋桁	横浜開港資料館
小田原高等女学校集合写真	小田原市郷土文化館
【写真】 転落した鐘撞堂と洗濯物	小田原市立中央図書館
【写真】 早川の河原で露天授業を受ける小田原高等女学校の生徒	小田原市郷土文化館
【写真】 お堀に転落する桜並木	小田原市郷土文化館
【写真】 小田原城址 崩れた石垣と倒木	小田原市立中央図書館
【写真】 傾いた小田原御用邸の門	横浜開港資料館

【謝辞】

本展の開催にあたり、貴重な資料をご出品くださいました所蔵者のみなさま、また多大なご協力を賜りました関係者各位に厚くお礼申し上げます。

資料名	所蔵
一藤木家アルバム	小田原市郷土文化館
【写真】 倒壊した山県有朋の別邸古稀庵	小田原市立中央図書館
【写真】 倒壊したリゾート旅館・藤館	小田原市郷土文化館
第一小学校の被災	小田原市郷土文化館
お堀端より見た火災	小田原市郷土文化館
一丁田 燃える宝安寺	小田原市郷土文化館
山下邸裏門の崩れた石垣と足柄病院の火災	小田原市郷土文化館
山下邸内の竹藪に避難	小田原市郷土文化館
燃える小田原高等女学校	小田原市郷土文化館
小田原通商銀行の被災	小田原市郷土文化館
倒壊したういろう	小田原市郷土文化館
箱根口のつるべ井戸	小田原市郷土文化館
湘南六題「湘南小田原」	小田原城天守閣
【パネル】 酒匂川上空の飛行機(複製)	東京都復興記念館
【パネル】 東海道根府川付近(複製)	東京都復興記念館
【写真】 根府川の海岸に転落した熱海線の列車	小田原市郷土文化館
【写真】 根府川の海岸に転落した熱海線の列車	横浜開港資料館
【写真】 寒ノ目山トンネル出口で土砂災害に巻き込まれた機関車	小田原市郷土文化館
【写真】 撤去作業の進むトンネル事故の機関車	横浜開港資料館
【写真】 山津波後の白糸川河口付近(上流をのぞむ)	横浜開港資料館
【写真】 山津波に襲われた根府川集落と鉄橋	石橋公民館
【写真】 山津波により埋没した白糸川橋梁	横浜開港資料館
【写真】 根府川駅付近から寒ノ目山をのぞむ	横浜開港資料館
関東大震災アルバム	個人蔵
技術資料	横浜開港資料館
関東大震災復旧工事写真帳 B	横浜開港資料館
【写真】 引き上げられた機関車	小田原市
【パネル】 機関車番号板	鉄道博物館
【写真】 根府川駅の再開 初列車の到着	横浜開港資料館
【写真】 根府川駅の再開 初列車の出発	横浜開港資料館
瀬戸美濃産 色絵皿(筋違橋町遺跡第Ⅱ地点出土)	小田原市教育委員会
火災で癒着したガラス製品(本町遺跡第Ⅶ地点出土)	小田原市教育委員会
3章 震災からの復興	
【写真】 郵便の旗を立て営業再開する郵便局	小田原市立中央図書館
【写真】 箱根越えをする避難民	小田原市立中央図書館
【写真】 焼け野原に建つ仮設バラック	小田原市立中央図書館
絵葉書「国道一号线改築工事」	小田原市郷土文化館
【写真】 震災で灰塵と化した松原神社	小田原市立中央図書館
【写真】 再建された松原神社	小田原市郷土文化館
松原神社神輿完成写真	済生堂薬局小西本店
感謝状(松原神社再興)	小田原市郷土文化館
【写真】 震災前の小田原 江嶋	小田原 江嶋
財産明細帳	小田原 江嶋
江嶋本店店則	小田原 江嶋
4章 いつか来る地震に備えて	
速度型地震計(水平動)	神奈川県温泉地学研究所
新収蔵資料特別公開	
尾崎道太郎氏 肖像写真	小田原市郷土文化館
彰状	小田原市郷土文化館
特別賞与金 授与証	小田原市郷土文化館
婚姻届	小田原市郷土文化館